

十八歳の時だった。ここに三年いた。校内が荒れた時代だった。教科の指導より生徒指導に苦勞した。

教育課程が改訂になり、英語が週五時間から三時間になった。都や区の研修会が何回も持たれ、指導法などについて話し合いがもたれた。

校内の研究主任をやらされた。毎月一回、研究授業を行う事になっていたので、授業をやってもらうのを頼むのに苦勞をした。授業のあと研究協議をやった。その記録を年度末に集録にまとめた。

(ホ) 北区時代

昭和五十七年、北区に転任になった。五十一歳だった。浮間中、田端中、豊島北中三校に七年いて退職した。

北区はどの学校にもLJ教室があった。毎月一回位は授業に利用した。機器になれ、授業の流れを作るのに苦勞をした。夏休みなどに区で使用法の研修会が持たれた。

また区には、外国人講師がいて、月二回位各学校に指導にきてくれた。生徒は興味をもったが、事前の指導内容の打合せに苦勞した。

平成元年まで三十四年間、英語の教師を務めて来た。この間、授業は教科書中心から、教育機器を取り入れる授業に変わってきた。

英語の必要性が叫ばれているが、週五時間から三時間にへらされた。その中で、三年生の受験対策をどの様に取り入れるかが今後の課題である。

正徳五年造立とされる 大聖寺山門について

加藤 幸一

越谷市内の大相模おおさがみにある真大山大聖寺しんたいさんだいしょうじの山門は、正徳五年（一七一五）に建立されたとされている。昭和四十二年（一九六七）一月十一日に市の有形文化財（建造物）に指定された。越谷市の有形文化財としては昭和三十六年（一九六一）に指定された増森まきもりの薬師堂の二十一仏板碑いたびに次いで、野島の浄山寺じやうざんじの大鰐口と並んで二番目である。

大聖寺は古来より今日まで「大相模の不動」と呼ばれて庶民から親しまれ、不動信仰の中心として極めて盛んであった。その寺の山門（惣門・仁王門）は堂々とした威容を誇り、左右に一对の仁王像が安置されている。文政九年（一八二六）頃に完成されたと思われる。「西方村旧記」によれば、大聖寺の仁王門つまり山門は正徳五年（一七一五）十月五日の造立とされている。このことは旧記が完成したわずか百年前のことであるからまず間違いないと考えるの

傳付以爲重器。享保庚子年二月寺災。講堂房舍一皆燒失。勢熾殆暨不動堂。住持僧隆元悲遭此殃。孽泣血祈請。風飈忽息。巍然得免。既而元竭力再管。手自振錫。乞資遐邇。四衆雨聚。不日功就。高軒飛甍。丹柱文觀。改觀舊時。曜美當今。先於是正。惠乙未年元新建。構門規製。施巧締攝。盡意榜上。安釋迦三尊。十六羅漢像。門則置持國多聞二天像。以爲羣生歸入之標。乃作三學紹隆之址。然志願之誤。固也。衝煌籠檐。餘燬熏棟。毫無所損。見者歎其不思議矣。堂傍有愛

大相模不動明王瑞像記

が普通であろう。しかし、この旧記の記載のみで断言してよいであろうか。そこで享保十四年（一七二九）に作られた大聖寺の巻物の縁起状を最初に紹介する。

（一）「大相模不動明王瑞像記」にみる正徳五年の記述内容「武州大相模不動明王瑞像記」は約千五百字の漢字よりなる漢文で著されており、その約三分の二のところに次のような内容が書かれている。

①正徳五年（一七一五）に楼上に釈迦三尊像・十六羅漢像、下に持国天・多聞天の二天像を安置した『二天門』が建てられた。

②享保五年（一七二〇）二月に火災が起こり、講堂その他の建物が焼失したが、不動堂は住職の隆元りゅうげんの祈願によつて免れた。また二天門も無事であった。

③隆元は火災に遭つて一部焼失したこの寺を多大な尽力により再建した。

この瑞像記は享保十四年に作成されたもので、十四年前の正徳五年に「二天門」が完成したのは明らかである。

（二）二天門について

持国・多聞の二天像を安置した二天門は高崎力氏の昭和三十四・五年頃の聞き取り調査によると明治二十二年十月九日、不動尊の門前町（山門の南西、昔の不動道つまり今の相模町三―一野口家と同町三―一〇四野口家に挟まれて

真大山仁天門原景



大正五年十一月復写

いる道で、同町三一八石塚家前、同町二一二三一浜野食鳥
K・K前を通っている道の両側に栄えた町並み)の中の山
崎湯屋(現、相模町三一〇一山崎家)より火災が発生
し、十七軒の建物を焼き尽くすとともに、この二天門の茅
葺き屋根に飛び火して全焼した。この時、二天門の眼が宝
石でできていると言われていたため、坊主の太助が火中に
飛び込み、眼を取ろうとして焼け死んだと言うエピソード
がある。二天門は正徳五年に建立され、明治二十二年に焼
失したのである。ところで、明治二十二年は誤りで、惣門
を残して全焼した明治二十八年のことをさすとも考えられ
るが、二十二と覚えやすい年代であるため記憶違いの可能
性は少なく、さらに明治二十八年の大火は七月であり(境
内にある「御座の松の碑」による)、二天門の火災は七月で
はなく十月九日と月日までわかるということから高崎説が
正しいのであろう。

写真は焼失する前の二天門の様子である。写真の枠外両
脇には「真大山仁天門原景」と「大正五年十一月復写」と
の添え書きがある。二天門奥には瓦葺きの本堂(明治二十
八年に焼失)が見え隠れしている。また二天門の前には一
対の石灯籠(常夜灯)が見え、現在もその場所に立ってい
る。この常夜灯は高さが約三メートル程あり、寛政元年
(一七八九)三月に馬口(ばくち)労働中により奉獻されたもの。現
在、火袋の所がセメントで補修されていて火口がなく空洞
ではない。これは火災を受けてこのままでは危険となった

ためであろう。

一方、旧記によると正徳五年に仁王門が建立されたことになっている。すると二天門と仁王門は同時に建立されたことになるが、はたして可能であるのかとの疑問は残る。あるいは二天門と仁王門は同一の門であるのか。二天門には仁王像が安置されておらず、同一の門であるはずがない。明らかに別々の門である。なぜ瑞像記に仁王門のことが一言も触れられなかったのか。不思議である。仁王門の建立は享保十四年以降であったとすると説明がつく。次に大聖寺境内に立つ「惣門修繕碑」について紹介する。

(三) 「惣門修繕碑」にみる惣門の沿革史

明治二十一年四月に造立された「惣門修繕碑」によると次の通りである。

夫 積善徳行の基礎朽る事あらんや 爰に当寺廿三世の住 木食戒円師 二王門なきは法に非と発願し 十方の信者に助成を得て 文化元年十二月 始て瓦葺の大惣門建立し 後ち嘉永元歳に至り 経る事四拾五年にして大破す 時に三十世の信剛比丘 広く有志を受 再興し 屋根を銅版に葺換す 永世不朽と思の外明治十三年に及て 僅に三拾 余年にして損破す 修補成り難を 西方 東方 見田方 三村の信徒同盟五十余名 一致相議し 懇篤世話方に尽力す 八方 有信の浄財を納得し 明治十七年に至り 修繕銅版葺落成す 宜なる

哉 是即ち 本尊明王の威徳と衆庶の功德と利益感応して成就する所謂なり 因て 衆 有志に報るに 五穀成満 家内安全 子孫繁昌の祈念怠る事なし 其功勲を 禱に勸して 後覽の為に備んと 爾云

明治二十一年四月 当寺三十二世

住 真鳥戒信 謹誌

つまり、仁王門がないのはだめだとして文化元年（一八〇四）十二月、初めて瓦葺きの仁王門を建立する。しかし、嘉永元年（一八四八）に大破する。そこで再建し屋根を銅版葺きにする。明治十三年（一八八〇）に損破する。修理しにくいのを修理し明治十七年（一八八四）に屋根が銅版葺きの惣門（仁王門）が完成する。

なお、その後明治二十八年の火災ではこの惣門のみが助かり、また、震災・戦災にも免れ、今日に至っているのである。

この石碑は惣門建立の沿革を解く貴重な資料と言える。もしこの比較的新しい石碑の内容が正しいとするならば、これより古い文政年間の資料である「西方村旧記」の記述はどういうことなのか。次に旧記を紹介し、その謎を解く鍵に迫ってみたい。

(四) 「西方村旧記」について

仁王門についての記述が載っているのは五巻からなる西方村旧記の内の第一巻『往古より旧記壹』である。第一巻

が完成後、張り紙として最初の方に添付されたものである。その張り紙には「以口上書申上候」と題する大聖寺より役人の田山守右衛門・松井平八あての口上書き（寺社関係者や武士に対する訴訟上の供述筆記）が載せられている。その内容は次の通りである。

ア 家康を祭ったお宮を建立したいが、そのために境内の中にある道三本のうち一本（中道）を塞ぎたいこと。

イ 以前から東照宮・不動堂拜殿・仁王門などを建立したいとの願いがあったが、これをかなえて欲しいこと。

また、そのあとに書かれている説明によると、文政年間に安養院から出てきたもので、年号・月日が記されていないのは残念であるとなっている。安養院とは大聖寺の塔頭（わきでら）の一つで、大聖寺の東隣り、現在の墓地がある所にあつた。そして最後に但し書き「但 仁王門造立 正徳五乙未十月五日 右門棟札ニ 書記有之候」が付加えられている。これが大聖寺山門正徳五年建立の根拠となった文である。但し書きは朱書きにされているが後に書き加えられたためであらうか。

仁王門建立は旧記によると正徳五年、修繕碑によると文化元年となっていて二つの資料の間に矛盾点がある。旧記第一巻に添付された張り紙は文政年間のものであるろう。しかし「但し書き」はいつ頃書かれたかわからない。張り紙

が書かれた時期と同じかもしれない。もし但し書きを書いた人がずうっと後の後世の人としたら、その人が二王門を仁王門と書き誤ったとの可能性がないとは言えないが、それだけでは仁王門の建立時期の謎を解く決定的なものとは言えない。つまり「正徳五乙未十月五日」と書かれた棟札が見つければ仁王門の建立は正徳五年であるなどと断定できようが、不可能なことであらう。結局この謎を解くためには次のことを説明する必要があると言えよう。

口上書きに出てくる田山守右衛門と松井平八はいつの年代の者か。

正徳五年以前の人物なら仁王門正徳五年建立は妥当と言える。

大聖寺山門創建が正徳五年であらうが、たとえ文化元年であらうが、また今日の山門が正徳五年に創建されたもの、あるいは文化元年か嘉永元年頃に建立されたものであるにしても、今日の大聖寺山門は堂々とした威容を誇り、越谷市が誇るべき貴重な文化財であることには変わりはない。山門の柱や礎石等を見るに、かなり古い建造物と思われる。また昭和五十一年に解体修理される前の仁王像の痛みのひどさを見るに、かなり古い像と思われる。以上より約三百年前の正徳五年建立がもっとももらしいが、惣門修繕碑によると約二百年前のものとなる。いずれにしても謎を解くために今後の調査・研究が望ましい。